

30. ワークショップを介した映像文化の動態保存について 山端 健志

本発表では前半に、発表者がこれまで行ってきたワークショップによる「映像文化の動態保存」について紹介し、後半には現在進行中のワークショップ「つくって観よう紙フィルム映写機」のデモンストレーションをおこなう。

デジタル映像が当たり前となった現在、映像と人間の身体運動との関係は希薄化している。かつては映像を映し出すためにフィルムを映写機にセッティングして、クラックを手で動かしつつづける必要があったが、現在ではボタンを押すだけで映像がいとも容易く再生する。発表者は、映像の起源とその原理原則を身体的に探るため、デジタル化以前、とくに戦前の映像文化の動態保存を試みている。

2019年に発表者は、太陽光と手回しの映写機を使う人力移動映画館「ニッケルオデオンワゴン」のワークショップをおこなった。移動映画館とは、昭和の初め頃に実在した子供映画館である。おでん屋風の屋台には黒幕が掛けられており、子供らは黒幕に首をつっこんで屋台の内側に張り付けられたスクリーンを見る。映写には家庭向けに百貨店などで販売されていたおもちゃの手回し映写機とおもちゃ映画のフィルムが活用された。おもちゃ映画には、映画館ですでにかけられた時代劇やアニメなどを再利用したものや、おもちゃ会社が独自に製作したものもあった。この移動映画館は戦後すぐ頃まで細々と存続したが、その後テレビが台頭した頃には消えてしまった。

人力移動映画館「ニッケルオデオンワゴン」は、2003年に大阪の道明寺商店街の協力と、映像文化史家の松本夏樹先生の監修の下で、造形作家の平田泰規氏が当時の移動映画館を再現制作したものである。「ニッケルオデオンワゴン」の最大の特徴は、太陽光を光源に使い、電気がない場所でも映画コンテンツが観賞できることである。また、ゼンマイ駆動の蓄音機を設置することで、映画のレコード式トーカーを可能にした。当時の子供映画館にこれほどの機能が備わっていたかはわからないが、どれも戦前に十分可能な技術である。

この「ニッケルオデオンワゴン」は、大阪の道明寺商店街や維新派演劇「キートン」の屋台村など2000年代に何度か活用されたあとは、松本先生宅に保管されていた。2018年に発表者は、当時武蔵野美術大学の講師として発表者を指導していた松本先生より「ニッケルオデオンワゴン」の紹介を受けた。この電気を一切使わない観賞体験は、デジタルメディアが主流となった現代において極めてユニークな映像体験であることを確信し、この映像装置の歴史的変遷を体感的に調べるべく動態保存を試みることにした。

そのはじまりは武蔵野美術大学の「映像文化史演習」授業内で、当時の担当教員

の松本先生の許可を得て活用したことである。授業で制作した学生たちのオリジナルフィルム作品を「ニッケルオデオンワゴン」で上映するのである。消滅したメディアを美大生という次世代の表現者たちがアート作品に昇華することで、それは映像文化の動態保存であるのと同時にコンテンポラリーアートとしての価値をもつ。また、専門性を有さずとも誰でも参加できることも証明された。発表者はこの取り組みを修士制作にも応用し、「ニッケルオデオンワゴン」を中心に6枚のパネルなどを配置した映像文化史のインスタレーションを展示した。

2020年、世界規模で新型コロナウイルスCovid-19の世界規模のパンデミックが発生したが、2023年現在は感染対策が緩和され始めている。そんな世情だからこそ体験・対面の意義を再評価する時代になった。そのため発表者は、現在所属している板橋区立教育科学館において、感染症対策を講じながらも参加型ワークショップの開発をおこなっている。修士研究のなかで発見した個人資料（映写機や蓄音機など）を現場に持ち込んで、資料の実演イベントをおこなう他、それらのうちどれか1種類のメディアを選び、その仕組みを手で組み立てられるよう工作ワークショップをおこなっている。例えば、明治日本でも人々の感染症対策の教化として活用された衛生幻燈会について、発表者は身近な工作材料を用いてスライドを作り当時の幻燈操作を追体験する「つくってうつす幻燈会」を実施した。識字率が低かった当時、教育を受けさせる重要性を説くためにビジュアルコミュニケーションを図る幻燈は、多くの教育現場でも重宝された。文字を投影するパワーポイントのプレゼンテーションと異なり、ビジュアルと生声でコミュニケーションを図る当時の幻燈は、未就学の児童から大人まで幅広い年齢層が参加できるワークショップであった。また現在においてそれを再現することにより、パワーポイントとは明らかに異なる「古めかしい」ビジュアルの幻燈に、子供だけでなく大人も生まれる前の世界観に「新しさ」を見い出し、「つくってうつす幻燈会」は大盛況であった。その他には、紙を手折りして蛇腹から組み立てる「つくってのこす日光写真」や、ゾートロープやプラキシノスコープ、フェナキスティスコープなど紙と印刷で構成されている光学玩具を一から組み立てる「つくってみよう！アニメーション」は普段何気なく鑑賞しているアニメーションの原理原則を探り、参加者オリジナルの作品としてハードウェアを作るワークショップもおこなっている。この一連の取り組みは「ニッケルオデオンワゴン」をきっかけに、映写機、蓄音機といった手回しで駆動する古い装置を実際に収集し、調査、復元する動態保存を試みたものである。調査では日本発明の紙フィルム映写機をはじめ、幻燈や蓄音機や手回しオルガンなど視聴覚に関する様々な史料を取り扱った。手で駆動するこれらの古い装置は、現在主流となっているスマートフォンやタブレットなどとは異なり「自分の手」で動かすことで現象が理解でき、かつ情報を発信する主体性豊かな体験を齎すのである。

発表後半は、板橋区立教育科学館での開催に向けて現在準備中のワークショップ

「つくって観よう紙フィルム映写機」のデモンストレーションをおこないたい。

紙フィルム映写機は、1932年に子供のおもちゃとして日本で開発されたもので、これまで現存品として東京の「レフシー」と大阪の「家庭トーキー」が知られていたが、このたび発表者は「月星印」を新発見した。「レフシー」はグラビア印刷で有名な辻本秀五郎が開発して家庭映写機株式会社が子供向けのおもちゃとして販売した商品である。「家庭トーキー」は家庭トーキー製作所が「レフシー」を真似て製作をはじめたが、蓄音機ユニットと映写機が合体した「家庭トーキー発声映写機」など特異な映写機も販売された。「家庭トーキー発声映写機」については、昨年発表者が現物を入手し、現在完全復元を試みている最中である。一方「月星印」は東京の水中商店により販売されたもので、専用映写機はおもちゃ映写機と絵葉書幻燈機をあわせたような簡単な造りになっている（福島、2022、p.287）。

今回のワークショップでは、月星印映写機と紙フィルムの複製品を製作体験してもらう予定である。映像表現に欠かせない道具（装置）を自らの手で作ることで、参加者に体感的に知ることの楽しさをぜひ追体験してほしい。

【参考文献】

福島可奈子『混淆する戦前の映像文化—幻燈・玩具映画・小型映画』、思文閣出版、2022年。